

私たち「桃豚」生産グループは、「安全で安心できる美味しい桃豚」を生産し、豚が消費者に届けられるまでを見つめ、「豚を農場から市場に出荷すれば終わり」という考えを否定し、豚を豚として売るのではなく、「豚を豚肉という商品（食材）として」食べる側の立場で「食の安全」を追及し、ますます努力してまいります。

消費者の26人に對する信頼回復を図るために平成16年7月25日に「生産情報公表豚肉」のJAS規格が頒布された。これは、食卓から農場まで、顔の見える仕組みを整備する目的のもので、その一環として食品の生産情報を消費者が正確に正確に伝えることを第三者機関（登録認定機関）が認定するJAS規格制度の認定である。このJAS規格は……

（一）誰がどのようにして生産したか
（二）第三者機関がわかること
（三）登録認定機関 がキチンと
生産情報を確認すること

私たちが和牛田原高原ポーク「桃豚」出荷肉JAS規格はこれらも、生産情報公表豚肉JAS規格に沿った信頼でまみれた生産情報を消費者の皆様に公表してまいります。

ICタグ耳標による 豚の個体識別管理

「生産情報公表体制」JAS規格は、肉豚生産者や流通・小売業に情報公開に向けた対応・仕組み作りを求めています。十和田湖高原ボロ・桃栗出荷グループでは、この一連の流れに率先して取組むべく、JASタグ付耳標を導入しての豚の個体識別管理システムをかねてより準備を進めてきました。この個体識別用JASタグは、主役までもない子豚の耳に直

[illegible]

この1イタタは三社の共同開発（全乳畜産サービス・富士通・ゴアビック）のシステムで、十和田湖高原ボークス（桃豚）出荷グループが日本で初めて導入しました1イタタは従来のバーコードと比較すると、はるかに多くの情報を盛り込める点で特長です。

また、1イタタはネットワーク接続を前提とした構成となっているため、タグに集約された膨大な情報を複数の管理者複数の事業拠点で共有することができま

JA奈良の「ミートランド」生産・流通の役割

農林水産省

申請 登録

認定登録機関

JA奈良 認定登録機関

JAマークを付けて販売

小売業者 (スーパー等)

JAマークを付けて販売

消費者

情報の伝達

情報の伝達

※認定を受けた生産者から認定を受けた流通業者へ

※店頭表示FAX、インターネット等による情報の公表

認定生産工程管理者(生産者等)

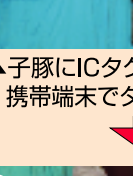
認定

認定小分け業者(販売業者等)

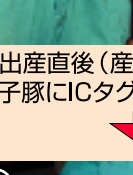
認定

ICTタグの運用

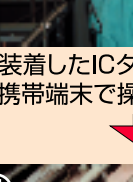
Ｃタグは、個々の健康状態や給餌量などを正確に把握・管理できる、生産情報公表に向けた画期的なシステムです。

- ①
 

▲子豚にICタグを装着する前に携帯端末でタグにデータを入力
- ②


▲出産直後（産後24時間後）の子豚にICタグ付き耳標を装着
- ③


▲装着したICタグ付き耳標を携帯端末で操作します
- ④


▲ICタグ付き耳標を装着した出産直後の子豚の授乳風景
- ⑤


▲離乳間近かの子豚（ICタグ付き耳標装着済み）
- ⑥


▲タグを装着した肥育豚（産後約20～25日齢）

母豚番号
A00001~

交配データ入力

子豚番号
000001~

ポータブル端末で操作

ICタグ付き耳標の読み書き

母豚番号入力

離乳日入力

移動日入力

出荷日入力

出荷

MICコンピュータ

格付け
肉質
枝肉重
その他

交配

分娩

ICタグ付
耳標の
取付け

母豚番号
D00001~

AI用精液
生産地のみ

出産後24時間以内の
子豚に読み込みされた
ICタグ付き耳標を装着

ICタグ付き耳標を装着
した出産直後の子豚▼

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

ICタグは、的確な
情報を提供します。

回付ければ、毎日の給餌情報だけでなく健康状態、万が一の投薬履歴、成長に従って豚舎を移動する場合も各拠点に固定された無線通信用のアンテナと読み取り装置を出し、必要なときに必要な情報取り出し、書き換えなどの拠点においても可能になります。

つまり、どの親の子豚で、いつ生まれるどんな飼料をいつどれだけ食べた、どのような成長過程を経たのか、病気や投の有無はどうか等、その履歴をすべて記録できるようにします。

このように利点の多い ICT タグです。デメリットも持ち合わせています。それは、開発費もないシステムですので、ICT タグ一個当たり単価がまだた高いものになっていることです。(2004 年 11 月 1 日現在、一個約 2000 円)

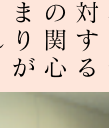
さて、私たちが十和田湖高原ポーク「豚出荷グループ」は、生産者として「本」に安全で、安心できる豚肉を消費者にけるために、この割高になつてしまうシステムに敢えて挑戦しています。このシステムを活用することで消費者の方々が公正な情報を高い精度で公表できると考えているからです。

イオン「生産情報公表豚肉」
JAS規格に準拠した豚肉
取扱い開始／記者会見
平成16年12月8日

生産情報を確認できる豚肉
として全国初の販売をイオン
が首都圏の一部店舗にて開始
いたしました。

販売に先立って去る12月8日、
イオン・品川Jアールサイド店にて
生産情報公開表豚肉「J-AS」規
格・有味豚の販売開始の記事
が引かれられました。これは
各社が詰

あけ、食
の安全・安
心に対する
社会の関心
の高まりが
感じられま
した。



表示します。
③ ホームページが表示され
たら、「生産履歴検索システム」
をクリックしてページ

② パソコンのホームページ
閲覧ソフトから、国内産豚肉
心確認システムのホームペ
ジにアクセスします。

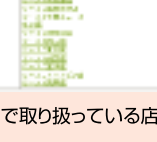
① ホームページが表示され
たら、「生産履歴検索システム」
をクリックしてページ

表示します。

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z

1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

検索

首都圏で取り扱っている店舗名もホームページから検索できます。



④ バックシールに記載されている生産履歴確認番号をページ上で入力します。

⑤ ホームページ場では、お求めいただいた豚肉の出产年月日、とさつ年月日などが記載された「生産履歴証明」と、与

と、飼料
 使用し
 医薬品
 記載さ
 た一生
 情報一
 ご覧い
 だけま

秋田魁新報／2004年11月11日掲載

(朝日新聞記事転写)

小坂、鹿角の「桃豚」出荷グループ
JAS認証取得

生産情報を公開

HPで消費者に

「桃豚」は、鹿角市平子町と小坂町の両町が中心となり、平成17年度から生産されている。肉質が柔らかく、味もよいことから、地元では人気がある。しかし、産地が狭いため、全国的には認知度が低かった。そこで、両町は、平成18年度から、JAS（日本農林規格）を取得し、品質を証明するようになった。また、生産者の顔ぶれや生産方法などの情報を、インターネット上で公開している。これは、消費者が安心して購入できるようにするためである。

「桃豚」の生産者代表として、鹿角市の佐々木隆雄氏（ささき たかお）が活躍している。佐々木氏は、平成17年に「桃豚」を生産し始めた。最初は、地元でしか売られなかったが、徐々に知名度が高まっていった。佐々木氏は、JASを取得したことで、より多くの消費者に「桃豚」を知ってもらえるようになった。また、インターネット上で生産情報を公開することで、消費者との距離が縮められたと感じている。

佐々木氏は、「桃豚」の魅力を最大限に引き出すために、生産方法を工夫している。例えば、餌には、地元産の大豆や小麦を使用している。また、運動不足にならないよう、猪舎内に運動場を設置している。こうした取り組みにより、「桃豚」の肉質が向上していると佐々木氏は述べている。

現在、「桃豚」の出荷量は、毎月約1トン程度である。主に、地元で販売されている。しかし、将来的には、全国へ出荷したいと考えている。佐々木氏は、「桃豚」の魅力を広く伝えるための活動に取り組んでいる。例えば、食育イベントに参加したり、学校へ訪問したりしている。また、インターネット上で「桃豚」の魅力を発信している。佐々木氏は、「桃豚」を通じて、地域活性化につなげたいと考えている。

「桃豚」の生産者は、今後も、JASを取得したことを誇りながら、品質の高い「桃豚」を生産していく方針だ。また、生産情報を積極的に公開し、消費者との信頼関係を築いていく考えだ。

日本経済新聞／2004年11月17日掲載

毎日新聞／2004年11月25日掲載

肉豚を管理

「Cタグで」

肉豚を「C」タグで管理

肉豚を「C」タグで管理

十和田増高原ファーム

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

生産履歴、個別に導入

[illegible]

「日本経済新聞」の「日本経済」欄に、1997年12月10日、11日、12日の3日連続で「JAS規格」の特集が組まれた。これは、日本農林規格（JAS規格）の普及を目的として、農林水産省が関係機関と共同で実施している「JAS規格普及キャンペーン」の一環である。このキャンペーンは、JAS規格の普及を目的として、農林水産省が関係機関と共同で実施している。このキャンペーンは、JAS規格の普及を目的として、農林水産省が関係機関と共同で実施している。

[illegible][illegible][illegible]

「この携帯電話は、私の生活に欠かせない存在です。仕事でもプライベートでも、いつでもどこでも連絡がとれるのは、本当に便利です。これからも、この携帯電話を大切に使って、コミュニケーションを大切にしていきたいです。」

[illegible]

安全性をより追求